

イースターメッセージ

「平和があるように」

神崎雄二（日本聖公会東京教区月島聖公会牧師）

イエスが十字架にかけられ、殺された時、弟子たちはみんな逃げた。そして部屋に鍵をかけて、閉じこもった。自分もイエス同様に殺されるのではないかと思って。

彼らは心の中にも鍵をかけた。イエスが捕らえられた時、弟子たちはイエスと権力の回し者の間に立って抵抗したり、闘ったりし切らなかった。「あの時、何としてもイエス様をお助けするべきだった。しかし逃げてしまった。」そういう思いが、「イエスを十字架にかけたのは自分である」という自責の念を持たせたと思う。だから弟子たちは、心にも体にも鍵をかけ、閉じこもっていた。

ところがそんなただ中に、復活のイエスが、現れたと言う。そしてイエスは、「平和があるように」と言った。そのお声には、弟子たちを裁くような響きがまるで無かった。生前のとおり、愛と慈しみのあるお声だった。そのお声によって、弟子たちは自分がイエスに裁かれていないばかりか、赦されている事実を知った。

その時以来、弟子たちは鍵のある部屋から出て、心の鍵も解いて、人々に「イエスは生きておられる！」と語り始めた。それが弟子たちの実感であった。

昨年夏、ベツレヘム郊外で農業を営んでいるパレスチナ人キリスト者ダウドさんの農場を訪問した。彼の農場に着く少し前の所で、道に土砂や岩が高く積み上げられていた。だから私たちは車を降りて歩かねばならなかった。彼の農場は、イスラエル人の入植地に囲まれており、その入植者が、道路を封鎖するためにそんなことをしているのだと言う。私たちが行ったその数日前にも、イスラエル人入植者たちがブルドーザーで農場に侵入し、ようやく実りかけたぶどうの木を何百本も引き抜いて行ったのだと言う。

そんな状況にもかかわらず、ダウドさん一家は、営々と3代にわたり、ぶどう、いちじく、オリーブ、アーモンドを植え、雨季には野菜を作る。雨水は徹底的にタンクに貯め、家畜の糞も人間のものも使って堆

肥を作り、有機栽培を続けている。

ここは Tent of Nations と名付けられ、国際的なワークキャンプも継続されてきた。外国人に対して開かれているばかりか、イスラエル入植者に対しても心は開かれ、「敵をも愛する」と言い切り、「ぶどうの木が抜かれれば、また植えればいいさ。主は必ず実りをもたらさせていただきます。主は生きておられます」と言う。ダウードさんの「非暴力抵抗」の思想には底力があり、真実の平和がある。

現在の私たちの置かれている状況は、一見平和であるが、平和が無い。国家は外交能力に欠け、軍備でそれを補おうとする。私たちは無力感を植え付けられ、ただ眺め、静観する。そうしている間に、ググッと右に動いて行く。

そんな私たちの心に、ダウードさんの「平和」が食い込んでくる。あの生き様が迫ってきて、真の平和へと私たちを促す。「立て！」と促す。